

## ふりかえり会議（中間検証）コーディネーター意見書

■ 事業名：平成 17 年度 熊野古道協働プロジェクト

■ コーディネーター氏名（所属）安村 富子 （みえ市民活動ボランティアセンター）

■ ふりかえり会議開催年月日：平成 17 年 11 月 30 日

### 1. 協働の状況について

（協働の妥当性・パートナー選択・資源配分と責任分担・意思決定のしくみと対等性の視点から）

昨年来の協働相手であり、「コミュニティカフェ」という拠点作りに一定の成果を挙げてきた NPO ミーツ。今年度は、蓄積されたノウハウを「大同医院プロジェクト」として生かすためのパートナー選択である。県とミーツの意思疎通に問題はないが、地域の人たちとの認識共有や責任分担に関する調整に難しさがあるもよう。事業自体が型破りと思えるような手法で行われており、いかに県と NPO がお互いを信頼して協働しているか想像がつく。当事者の雰囲気からして、まさに対等の関係から事業が進められている事は明らかである。

### 2. 実施事業の状況について

（戦略性（計画性）・事業の継続性と柔軟性・情報公開の視点から）

地域コミュニティーづくりに対するニーズの高さは実証済みであり、今年度も継続して地域住民に手法を還元していく。地元民にとって心地よいまちづくりは、外部の人々にも魅力的に映るはず。そうした気づきをすることで、この地域の活性化は約束されるはず。県として情報共有は積極的に行っているが、情報が本当に地域に（特に市当局）理解されているかということ、関係者の多さからして疑問も残るようである。当事業は今年 6 月よりスタートしているが、これは関係者との調整にかなり時間が取られたからである。こうしたステップを踏む事によってお互いの信頼感につながっている。OJT を基本とした事業の性格上、スケジュール管理という視点は馴染まないと思う。

### 3. 事業実施体制について

（資源配分と責任分担・意思決定のしくみと対等性・事業の継続性と柔軟性・情報公開の視点から）

あくまでも市民と直接話し合うなかで、進めていくまちづくり。まちのポテンシャルをあげていくために、県は NPO にコーディネート力を求め、現時点で双方がうまく噛み合っているもよう。ボトムアップのこうした事業があちらこちらで立ち上がっていくことが、地域の活性化につながるという非常に興味深い先進的事例を垣間見ることができた。費用についても所有者の資源となるものについては所有者負担となっており明解である。事業終了後、民間でプロジェクトの継続ができるような仕組みづくりの必要性も十分認識されている。

#### 4. 活動領域について

(資源配分と責任分担の視点から)

現状の活動領域	目指すべき活動領域
B2	C

#### 公の活動領域の考え方

Aの領域：行政だけで担っている領域

Bの領域：県民と行政が共に担っている領域

#### 公の活動領域

					私的 領域 (市場)
行政が担う公	B1	B2	B3	県民が担う公	
A				C	

B1：行政が主となり県民が参加参画協力する領域

B2：県民と行政がそれぞれ役割分担する領域

B3：県民が主となり行政が支援している領域

## ふりかえり会議（中間検証）コーディネーター意見書

- 事業名：平成 17 年度 熊野古道協働プロジェクト
- コーディネーター氏名（所属）：亀山裕美子（コミュニティ・シンクタンク「評価みえ」）
- ふりかえり会議開催年月日：平成 17 年 11 月 30 日

### 1. 協働の状況について

（協働の妥当性・パートナー選択・資源配分と責任分担・意思決定のしくみと対等性の視点から）

当事業は、平成 16 年度熊野古道協働プロジェクトを発展的に引き継いで行われている事業である。平成 16 年度に行った「まちづくり」に関わる人の拠点づくり（Café cream）を活かして、平成 17 年度は地域への一層の広がり与人づくり（まちづくりの人材の発掘、参画）といったフェーズにシフトしている。

県担当者は直接的なパートナーである岡山県の NPO ミーツ、および現地のカウンターパート（プロジェクトに関わる若者たち）の相談役、両者や地域とのコーディネート役として機能し、NPO ミーツはアートを切り口にしたまちづくりの手法を実際に行うと共に、カウンターパートである若者たちに専門的知識やノウハウを提供し、カウンターパートである若者たちは、今までに「まち」になかった「アートによるまちづくり」に共感を覚えて主体的に活動しており、それぞれが自分たちの持つ特性をプロジェクトに提供している。

### 2. 実施事業の状況について

（戦略性（計画性）・事業の継続性と柔軟性・情報公開の視点から）

「まちづくり」は、「ひとづくり」と言われるが、アートという切り口により、シャッターの下りた商店や古民家の改装を通じて「まちづくり」に若者の心をひきつける「おしゃれ」「かつこよさ」を持ち込み、地元の若者たちが「まちづくり」に参加するべく巧妙に仕掛けるなど、パートナー同士の意思疎通や連携の賜物であるように感じられる。

現地の若者たちへのイベント、改築、広報といったノウハウや技術の移転が積極的に行われており、「まちづくりに寄与する人材の育成」という観点から、同事業終了後も人々によって形は変わっても「まちづくり」が行われていくであろう可能性がうかがえる。

ゴールが明確でなく、責任体制についても若干任せた観はあるが、最終的に事業を実施している若者たちに、義務感や責任というものを感じさせないことで、市民が動きやすい仕組みを担保していることは、企画者・実施責任者として責任を一手に引き受ける担当者の、市民への知識と経験の深さと配慮を感じる。

### 3. 事業実施体制について

(資源配分と責任分担・意思決定のしくみと対等性・事業の継続性と柔軟性・情報公開の視点から)

大げさな鳴り物入りになりがちな「まちづくり」事業は多いが、「ひと」が「まち」に「関心を持つ」ことから始める、という原点にたったプロジェクトは、トライアル&エラーとゴールを定めてはいないが、それだけに、関わる人々の自発性や主体的な取り組みを推進していると考えられる。

プロジェクトの企画自体の魅力（斬新さ、創造性）が関心を高め、主体的な関わりをつくり出している。

### 4. 活動領域について

(資源配分と責任分担の視点から)

現状の活動領域	目指すべき活動領域
B 3	B

#### 公の活動領域

					私的 領域 (市場)
行政が担う公	B 1	B 2	B 3	C	

#### 公の活動領域の考え方

Aの領域：行政だけで担っている領域

Bの領域：県民と行政が共に担っている領域

B 1：行政が主となり県民が参加参画協力する領域

B 2：県民と行政がそれぞれ役割分担する領域

B 3：県民が主となり行政が支援している領域

Cの領域：県民だけで担っている領域

## 金色の実りを夢みる熊野古道協働プロジェクト（まちづくり）

行政が行うプロジェクトはある意味、規格と工期・納期の決まった工業製品の工程管理になぞらえられる。しかし、そこでアクターとして登場するのは、地域性や知識・経験の様々に違う住民という存在である。住民主体の地域づくり事業という場合、そこには事業の枠組みにあてはめることが土台不可能な「住民」が存在する。それらは、「つくる」よりも「育てる」あるいは「生育を見守る」という観点が必要となる。

3年間のプロジェクトで一定の成果を得るための計画を立て、進捗管理を行う中で、住民の本来持つ力「自発性」が失われてしまうことがある。青く未成熟なままに刈り取られた穂は、それを食べてしまえば終わり、次の実りを生むことはない。

このプロジェクトは稲づくりに似ているといえる。1粒の種を蒔き、次年度は50粒に、それを刈り取らずにまた次年度へと引き継がれていく。その生育の時を待つ気の長い事業である。いつになれば、成果として刈り取れるのかわからない。ある一定の区画が金の稲穂に包まれたときようやく人々の前に姿を現す。そういった事業である。

本プロジェクトのキーワードは“リノベーション”。それはとりもなおさず見慣れたものを外部者の目を通して再発見し、洗練し、再構築していくことにある。

カフェクレームという装置を使って、地域の人々が関心を持ち、人がそこに集まり、そこからまちづくりが始まる。綿密に仕掛けられた仕組みだが、そこには人を操作するというあざとさがなく、好感が持てた事業だった。地域に担い手が存在しないならば、誰かが仕掛ける必要があり、それは行政でも市民でも、気づいて、できる人から、できることを始めるということで理解している。